

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

中村融子

【所属】(助成決定時)

京都大学アフリカ地域研究資料センター 役職：特任研究員

【研究題目】2000年代以降のベナン共和国の現代美術シーンにおける「アートセンター」の役割
美術の脱植民地化とアートのインフラ

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、アフリカ現代美術シーンの中でも重要な、2000年代以降のベナン共和国における「アートセンター」の役割を地域が目線で明らかにすることだ。近年、アフリカ諸国出身のアーティストやキュレーターが国際的なアートワールドで存在感を高めている。その活躍は、旧来的な美術の規範の中で「認められる」に留まらず、その規範の西洋中心性を見直し、規範を「複数化」するに至っている。特にベナンでは、2021年にフランスからダホメ王国時代の略奪文化財が返還され、その返還品と現代美術の二部構成の大規模展示を開催、同展(の一部)が国外に巡回するなど、「脱植民地化」の観点で重要な動向が相次いで起こっている。

アフリカの「美術」と「脱植民地化」については、1960年代の独立に伴う文化政策や、1989年「大地の魔術師たち」展以降のアンドレ・マニャンの活躍とそれへの批判、オクウィ・エンヴェゾーらのポストコロニアリズムに基づいた芸術祭のキュレーションなどが知られている。しかし、2000年代以降、アフリカ大陸の諸都市で誕生する複合的機能を備えたアートセンターの役割への言及は少ない。

アートセンターは、依然、高等教育・ハイカルチャーが旧宗主国の知的枠組みで運用されるアフリカ諸国において、在来の文化、ローカルの言語や感性を取り込み、美的規範やそれを取り巻く知的体系自体の脱植民地化を志向している。本研究は政治・経済的には西アフリカの小国でありながら、多くの現代美術のアーティストを輩出し続けるベナン共和国で、アートセンターが果たす役割に着目し、それらの地域の文化生態系における具体的な役割を明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

研究の内容は、日本国内で行う文献や資料調査・オンラインでの聞き取りと、ベナン共和国でのフィールドワークの二部で構成された。

●国内調査●

2023年の10月から、博士論文の執筆を行いながら、関連する図録・文献のレビューを行った。また、ベナンのアーティストの経歴についての資料調査と、オンラインでのインタビューを実施した。ベナンでは、ガーナやセネガルのように、独立運動と関連した文化政策や美術運動、その遺産としての美術大学などが無い。ベナンの美術史家ロミュアル・チボゾは独立期に活動をはじめた現代美術「第一世代」というべき世代から、後進を育てるようなイニシアティブが存在せず、それぞれがパトロンを見つけたり海外留学したり、各自の工夫で活動を継続したと説明する。1990年代頃からチボゾのいう「第三世代」が、アンドレ・マニャンやピゴッツィ・コレクションの展覧会、オクイ・エンヴェゾーやシモン・ンジャミがキュレーターとなる芸術祭を通じて、「グローバル」なアートシーンに紹介されはじめるが、一方で、国内の美術インフラは乏しいままであり、さらにベナン国内で「美術」を扱う場所が、フランス人やごく一部のエリートの行動圏内である一方で、地元の生活者たちの場との乖離がみられると Tchibozo (2005)は述べている。

しかし、このような状況を背景に、チボゾが「第五世代」と呼ぶ、1970年代に生まれのアーティストたちが、自主的に美術の場所を作りはじめ、また後進を育てるゆるやかな協働を実施しはじめた。現在ベナンに存在するアートセンターはこの第五世代のイニシアティブにより、またそれが後世のアーティストや文化実践者の働きにも大きな影響を与えていることが資料調査と聞き取りから判明した。

そこでこの第五世代の働きと彼らに影響を受けた若い世代の動向を調査の中心に置くことを決め、2024年7月下旬から9月中旬までベナンに渡航して滞在調査を行った。

●現地調査●

7月と9月は、コトヌを拠点に、アートセンターやアーティストを訪問して、聞き取りを行った。

8月は一ヶ月間、ポルトノボのアートセンター、La Grande Placeに滞在し、参与観察を行うと共に、近隣のアートセンターやアーティストのアトリエなどを訪問した。La Grande Placeでは、リサーチ・レジデンスの形成をとり、宿泊・調査や移動に関する謝金を支払った。

【結論・考察】(400字程度)

ベナンでは、公的な文化政策が脆弱な状況を背景に、アーティストや知識人たちが自主的に場を創出し、文化実践者たちが(ときにフリーランスで、ときにそれらの場に所属しながら)それらの場所を拠点に柔軟に活動し、美術の制作や鑑賞・普及を支える豊かなシーンが形成されていることが分かった。

そのシーンの形成にアートセンターが果たす役割は以下のようなものである。まず若手アーティストに制作・展示の場を与えるだけでなく、コンセプトの発展や実験のため機会を与える。そしてキュレーターや編集者、モデレーターなどの多くの文化実践者の育成にも貢献し、アーティストとそれらの実践者のネットワーキングのハブにもなっていた。また地域の鑑賞者やコレクターに前衛的な視覚文化の更新を繋ぐ地道な取り組みを実施し、特に、子供たち向けの施策に力を入れるところが多い。子供たちが自主的にアートセンターに遊びに来るよう、美術に限らず多様な企画を開催し、Grande Placeはもはや「学童保育」のようになっていた。

また今回の訪問で、国内だけでなく、西アフリカの国家横断的な文化シーンの形成にもアートセンターが貢献していることが分かった。従来も、アンスティチュ・フランセなど、旧宗主国のヨーロッパとの交流を実施する文化機関は存在したが、アートセンターは、トーゴやカメルーンの同様の文化機関と協働して、交換レジデンスや国際映画祭の実施、西アフリカを巡る演劇のツアーなどを実施する拠点となっていた。

グローバルな文化状況においても新植民地主義の残存はかねてから指摘されてきたが(Okeke-Agulu & Enwezor 2009)、それぞれの国内においても、ハイカルチャーや前衛的文化と、在来文化や生活文化との間に、植民地支配に由来する分断がある。近年のベナンのアートセンターの取り組みや、そこから生み出される作品、視覚文化の語彙は、その分断を架橋するような性質を持っている。カリブ海文学者のジョージ・ラミングは小説『冒険の季節』(1960)を通じて、エリート「交渉の言葉」が大衆を排除し、大衆の「行動の言葉」が「貧者の重り」となっているカリブ海社会の状況を、「頭と胴が分かれている」と表現した。ラミングは、植民地支配の遺産であるこの分断を乗り越え、一つの社会として未来に向かっていくための「頭と胴を繋ぐ」言語の必要性を訴えるのだが(Lamming quoted in Scott 2002)、ベナン国内の現代美術シーンで現在進んでいる「脱植民地化」は、このラミングのいう「頭と胴を繋ぐ」ようなものであると結論づけられる。

【参考文献】

Lamming, George quoted in David Scott, "The Sovereignty of the Imagination: An Interview with George Lamming," *Small Axe* 6, no. 2 (2002): 72-200.

Okeke-Agulu, Chika and Enwezor, Okwui. 2009. *Contemporary African Art Since 1980*.

Damiani Editore, Bologna

Tchibozo, Romuald. 2005. *Harmattan 2005 : Art contemporain au Bénin*. Centre Culturel Français Cotonou.